

都市のリビング

Keywords

動線 広場 回遊性
空洞化 滞留 都市空間

1. prologue

住みたいと思う街とはどんなところか？
郊外の駅前高層ビル群などの都市開発による風景の均質化、更にインターネットの発達により場所としてのこだわりが失われていく。郊外におけるその土地の価値は、都心との交通手段の利便性によって判断されがちである。しかし、少子高齢化を迎え経済的に成熟してきた日本において、実際生活をする上でその地域の魅力は、交通手段などの利便性だけではない。

2. 研究背景

2.1 東京とベッドタウン

都市の街並みの歴史は、関東大震災や戦争によって一度都市が消滅し、その復興事業の区画整備や都市開発事業によってリセットされてきた。都市形成の特徴として、交通手段となる道路や鉄道のインフラを中心にして人々の生活が栄え、都市計画の中心となっている。その結果急激な都市の成長によって、都心から郊外へ発生的に都市への通勤者向けに形成されたベッドタウンが出来上がった。

2.2 柏

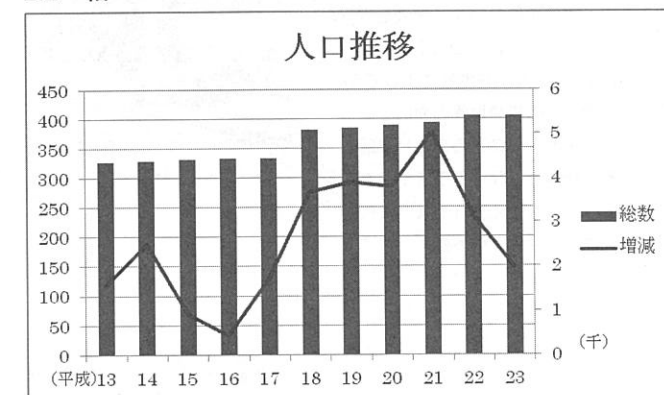


図1 柏市の人口推移

柏市は、千葉県の北西部に位置する市である。1970年前後より東京のベッドタウンとして人口が増加し、人口40万人の中核都市であり業務核都市に指定されている。

しかしながら、近年増加率は減少していき、移転人口が入居人口を上回る結果となった。(図1) 都心回帰の



K08042 菅野 怜奈

影響や、モータリゼーションの発展により国道6号および16号線沿線や隣接市の郊外に大型ショッピングセンターが相次いで開業し、秋葉原=つくば間を35分でつなぐつくばエクスプレスが開通するなど(平成17年)、柏駅を経由して都心へ通う通勤・通学客、買い物客の減少が大いに懸念される。今、全国各地でこのような郊外での商店街の衰退、中心市街地の空洞化が問題となっている。

3. 研究目的

柏は都心にもほど近く、欲しい物は何でも手に入れることが可能で、娯楽施設も揃っている。しかし人の流れは常に流動的で、柏駅は都心と家を繋ぐ地点に過ぎず、駅と家を行き来するのみである。便利である一方、生活行為の場とは切り離され、金銭を消費する目的以外に留まることが難しいのが現状である。また、柏は千葉の渋谷や原宿と言われ、若者が多いのが特徴と知られている。東口にあるペDESTリアンデッキでは毎日沢山のパフォーマーが披露しており、柏の玄関口となっている。流動的な若者に対して、地域住民である高齢者や子供が気軽に休める場が、駅周辺に極端に少ない。その結果駅から離れている図書館には、高齢者が本を読むわけでもなく散歩の一環で集まり、駅ビルの階段には若者が座り込む現象が起きている。利便性を重視して無駄な空間を排除するだけでは生活しづらい空間となってしまう。

地域特性・空間から独立した建築ではなく、駅周辺の人の活動動線の中心を読み解き、そこに日常生活行為の延長上にある自然に滞留する都市空間を提案する。通り過ぎていた人と地域を結びつけ、柏独自の活動を活性化させることを目的とする。

4. 敷地

対象は柏駅周辺の中心市街地の一丁目付近にある敷地に設定する。この敷地はアーケード街に接し、休日の歩行者天国になる道に挟まれ、その延長線上には50年以上の歴史を持つ商店街がある。更に都市開発が盛んに行われ、タワーマンションや高齢者向け共同住宅・病院が併設される歩行者系都市計画道路が横断し、周囲には柏の特徴でもある若者が集まる古着屋やセレクトショップの

ある路地が広がる。駅前開発によって賑やかに発展した街路に面している反面、この敷地内を通る路地は開発に置いていかれ、老朽化が進んだ平屋や二層の建物が雑然と立ち並んでいる。しかし、ヒューマンスケールの名残はスケールの大きな都市と違って安心感を覚える。

柏に來た人も、柏の住人も必ずこの敷地の周囲を歩くことになる。人の動線から考えるとこの敷地は中心市街地の核になりえる。



図2 人の導線分類と敷地図



写真1 対象敷地周辺の様子

5. プログラム

周囲の環境を取り込みながら自然と引き寄せられるような、道と広場と建築が一体となった都市空間を計画する。

敷地内に新たな発見や出会、滞留する要素として図書館・インフォメーションセンター・売店・展示室・多目的ホールを、回遊性を持った動線上に配置する。

6. 設計手法

6.1 動線

本計画敷地内は、表通りに接する建物の陰になって、1~2層の建物や駐輪所として利用され、主な動線から外れている。そこに既存の路地を含め、それぞれの特徴を

持った歩道を中心に引き込む動線を計画し、引き込んだ動線が交わる中心にシンボリックな空間を計画する。その空間を中心にして公共施設の空間と広場などの滞留空間を、回遊性のあるもう一つの導線で繋いでいながらゾーニングする。これにより、駅と家を行き来する行為、買い物をする行為の合間など、様々なシーンに都市空間を織り込み、他の動線と結びつけることで新たな出会いを促す。(図3)

6.2 曲線

曲線の壁を用いることで人の動線を導く道と、滞留する空間を同時に生み出し、直線を用いるよりも外部と内部を緩やかに繋ぐことが可能になる。

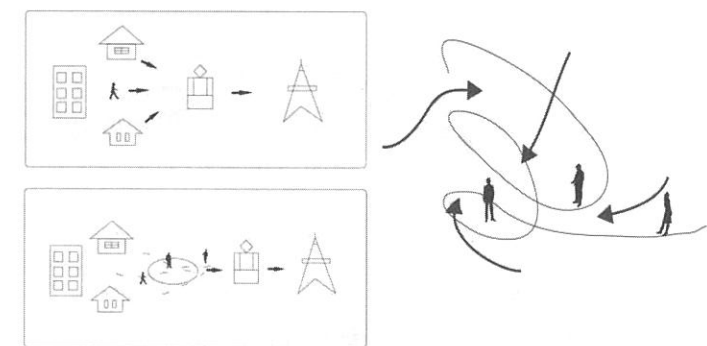


図3 イメージ図

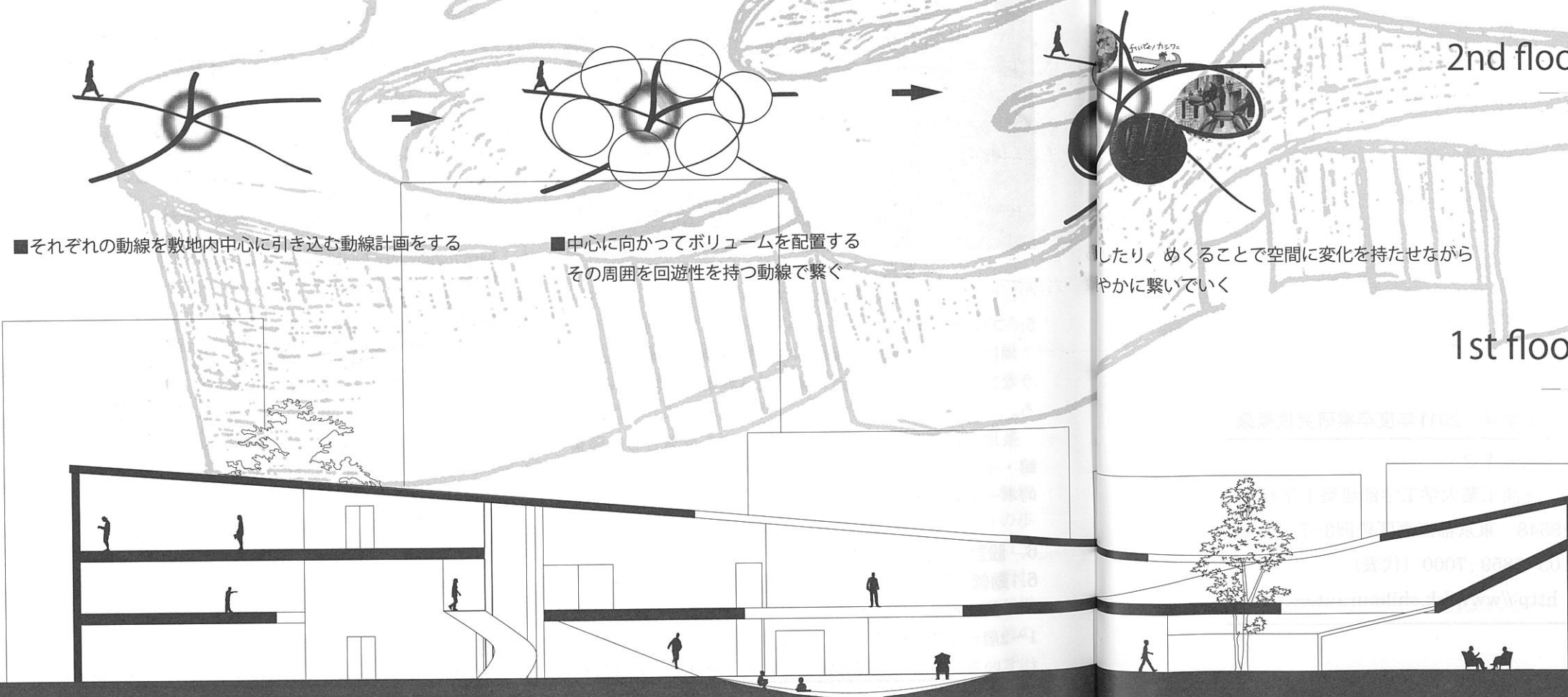
7. 参考文献や註など

- 1) 「東京都市計画物語」越沢明著、日本経済評論社、1991
- 2) 「アースダイバー」、中沢新一著、講談社、2005
- 3) 「建築はほほえむ」、松山著、株式会社西田書店、2004
- 4) 「地域社会モデル」、山本理顕・中村拓志・藤村龍至・長谷川豪、INAX出版、2010
- 5) 「アーキテクチャの生態系」、濱野智史著、NTT出版、2008
- 6) 「現代建築の軌跡」、川向正人、鹿島出版会、2005
- 7) 「柏市都市計画マスタープラン」
<http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/140300/p005637.html> (アクセス: 2012/01/20)
- 8) 「千葉県警察」
http://www.police.pref.chiba.jp/police/police_department/kashiwa/crime-situation/ (アクセス: 2012/01/13)
- 9) 「柏その歴史・地理」、相原 正義著、嵩書房出版、2005

kashiwa station

- a' 歩行者天国
- b' アーケード
- c' 歩行者系都市計画道路
- d' セレクトショップ
- e' 50年以上の歴史ある商店街

動線計画から壁を形成する



■それぞれの動線を敷地内中心に引き込む動線計画をする

■中心に向かってボリュームを配置する
その周囲を回遊性を持つ動線で繋ぐ

したり、めくすることで空間に変化を持たせながら
やかに繋いでいく

3rd floor

2nd floor

1st floor

section 1/400

30m